
あやつりの糸

河野 る宇

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

あやつりの糸

【Nコード】

N0483S

【作者名】

河野 る宇

【あらすじ】

*私の理想を実現するために君が必要なんだ。だから……おいで……私の元へ——
小説サイト「野いちご」にも投稿させていただいている作品です。

序章　張られた罫

オープン・カフェの白いテーブルセットが疲れた街ゆく人々の足を止める。そのイスに腰掛ける1人の青年はアメリカのフロリダ州にある小さな街の一角でカフェ・ラテを傾けていた。

名はベリル・レジデント。金髪のショートヘアにエメラルドの瞳。外見は25歳ほどだろうか。優雅にカップを傾けているこの青年の職業はフリーの傭兵だ。それだけでも珍しいと思われるが『不老不死』という存在になって10年になる。

本なら現在は35歳のハズである。しかし彼は25歳に不死になったため35歳である現在も25歳のままの外見をしている。

そんな信じがたい存在の彼を誰も気にも留める事はない。彼が生業としている世界では公然の秘密として広まっているからだ。

『あつてはならない存在』

そんな存在を人は“ミッシング・ジエム”と呼ぶ。

ほんの一部の人間が人知れず語る言葉――希少価値であるがゆえに人類の記憶に値するものでない存在。

そんなこんなで色々と苦勞はしてきたものの彼は彼なりに今の生き方は嫌いでは無かった。

「！」

そんなベリルが一仕事終え2、3日のんびりしようと思っていた時、目の前のイスに青年が笑顔で腰掛けた。

「？」

記憶に無い顔。ベリルは怪訝な表情を浮かべる。

「やあ」

「誰だ？」

ウェーブのかかった栗毛のショートに青緑の瞳。

「初めまして。かな」

「……」

やはり記憶に無い。

「あれ。解らないかな？ もっとよく見てよ。僕は父によく似てるんだけど」

「父？」

言われて青年の顔をじつと見つめる。

この目元、どこかで……目を細めるベリルに青年は口の端をつり上げた。

「！」

刹那、ベリルの心臓がドクンと音を立てた。なんだ？ この嫌な気分は……

「少し思い出したみたいだね」

そう言ったあと青年はベリルに顔を近づけて耳元でささやいた。

一瞬——世界が反転した。ベリルは目を見開き大きく椅子を揺らして立ち上がる。

「……」

彼は確かに聞いたのだ「キメラ」と……

無表情ながらも自分を見下ろすベリルにその青年は小さく笑って続けた。

「そろそろ父さんがあなたを迎えに行けって言うから僕が来たんだ」

「……なんの話だ」

「やだなあ。まだとぼけるの？」

しれつとした態度の青年を見つめながらベリルは必死に震える手を抑えた。

「彼は死んだハズだ」

「そう聞かされたんだね。でも本当は殺されかけたんだよ」

ベリルはそれにさして関心を示さず青年に目を合わせる。

「何の話が解らん」

言って遠ざかった。

「……」

そんなベリルの後ろ姿を青年は笑って見つめ、ニヤけた口から絞

り出すように笑う。

「君はもう逃げられないよ」

つぶやいた瞬間——「！」

目の前が歪んでベリルは壁に手をついた。

「父が待ってるんだ」

青年はゆっくりベリルに近づいて発する。

「う……っ」

この感覚は睡眠薬だ。倒れそうになりながらも壁に背を預け頭を数回、振ってゆっくり前に立つ青年を見上げた。

「……いつ」

「ウエイトレスが目を離れた隙にちよつと……ね」

そして必死に眠気と闘っているベリルに顔を近づけて目を据わらせる。

「案外しぶといね。我慢したって無駄だよ。今の状態でも十分に君を運べる」

174cmのベリルより少し高い位置から青年は言ってニコリと笑う。

その顔が目には焼き付いた頃、ベリルは意識を無くした。

「！　そうか！　よくやったトラッド。丁寧に運ぶんだぞ」

OA機器がずらりと並べられた部屋で左足を引きずった白髪の老人は、かかってきた電話に興奮して杖を振り回す。

「よしっよし。これで私の理想に一步近づいた」

電話を切って勝ち誇ったような顔を向ける。

「さあ、早く用意するんだ。彼が来てしまっじゃないか」

老人はそこにいる男たちに手を挙げて指示をした。嬉しさのあまり声がうわずっている。老人の声で力仕事をする男たちも白衣を着た人間たちも急ぐように作業を進めた。

*再会

トラッドと呼ばれた青年は自家用ジェットに眠っているベリルと共に乗り込むと飛行機は静かに滑走路を滑っていった。隣で眠っているベリルを見つめる。

「……」

頭はキレるようだが、やはり過去の事は彼の心に大きな傷を残しているらしい。

「キメラ」というたった一言であれほどの動揺を見せるとは……トラッドはベリルのその整った顔に指を滑らせた。

「！」

ぴくりと動いたベリルに気づきその腕に新たな麻酔を打つ。

元々、治癒能力の高かったベリルは不死になった事で薬物にも飛び抜けた回復力を持つようになった。

死なない体の唯一の弱点は麻酔——それで幾度となく捕えられ研究が繰り返されてきた。だが結局は何も見いだせずそうこうしている間にベリルは逃げ出す。

逃げ出す時についてにその組織も壊滅させて事なきを得るのだ。

そうやって壊滅させられた組織がいくつある事か。

「ある意味、素晴らしい能力だけだね」

トラッドはぼそりとつぶやいた。ここまで戦闘に長けた者はいないだろう。軍事目的で彼の能力を研究したい組織もあるかもしれない。

「まあ、父に会ってその力を遺憾なく振る舞えばいい」

「ああ……まだか」

老人はトラッドの到着を今か今かと待ちわびた。捕えたと連絡してきたのは数時間前なのだから場所からしてもうすぐなハズだ。杖を持つ手がそわそわしている。

「！」

そんな時、厚い扉が開かれた。その腕に抱えられている男を見て
歓喜の表情を浮かべた。

「お……おおお！」

興奮したような声で円筒形をした透明のスペースに促す。

「そ、その中に……」

トラッドは中に入り静かにベリルを床に寝かせるとその顔を一瞥
して外に出た。

「とうとう私の手に……」

老人は透明の壁にへばりついて喜びをあらわにした。

「い、いつ目覚めるのだ？」

「もうしばらくかかると思います」

「そうか、そうか」

老人はベリルを微動だにせず眺めた。

その表情は、ようやく会えた恋人に向けられるような眼差しだ。
彼にとっては果てしなく長かったのだろう。1年が10年にも思え
たに違いない。

「う……」

ベリルは静かに目を覚ます。その顔は今までのものとは少々違っ
ていた。

捕えられても平然としていた今までの彼とは……

「久しいなベリル」

「……」

そう言った老人の顔に眉をひそめる。

「どうした、忘れた訳ではなからう？」

「今更、私に何の用だ。ハロルド」

それにハロルドは口の端をつり上げる。ベリルのしゃべり方に何
かを確認したような顔になった。

「お前は死んだハズだ」

その言葉にハロルドは苦々しい表情を浮かべ吐き捨てるように発する。

「私は殺されかけたのだ。あの“分からず屋”どもにな」

「殺されかけた？」

問いかけたベリルにハロルドは語気を荒げて語り出した。

「君を見た時、私の理想にぴったりだと思った。私は確信していた。しかし奴らは私の考えは危険だと言って毒を盛ったのだ」

心臓発作に見せかける薬——当時、若き言語学者だったハロルドはその薬で一度は死んだものの再び息を吹き返した。

「ああ、あの“つまらない講義”ね」

ベリルは肩をすくめ笑って言い捨てた。しかしハロルドはそれに怒る事もなく続ける。

「私はそのまま死んだ事にした。その方が計画を進めやすいのでな」
一端、言葉を切って深く呼吸した。

「君には最高の教育を施した」

「このしゃべり方がか？」

皮肉混じりに言った言葉に老齡の男性は嬉しそうに発する。

「当たり前だ。支配者はそうでなくてはならん」

ベリルはそんなハロルドを睨み付けた。

「2歳頃からお前の教育を受けたがいつもお前はうるさかった。『

世界は1人の支配者で統一されなければならない』。そんな馬鹿げた空想に誰が乗るものか」

「君はかしこいね。あんな幼少期から私の言う事を理解していたのだから」

彼の嫌味にもハロルドはまったく関心を示さない。目の前の理想に目を輝かせているのだ。

「まあいい。これからゆつくりと私の理想を叶えてもらおう」

今日の処はここまでだ。ハロルドは言って部屋から出て行った。

「……」

ベリルはそんな老人の後ろ姿を陰しい目で見つめた。

第1章　胸の痛み

ベリルは誰もいない部屋で1人、壁に背中を預け片膝を立てて考える。暗い室内に電子音だけが響いていた。

いつもの彼ならどうやって逃げだそうか算段している頃合いなのにその気配は無い。

「……っ」

何かを思い出して苦い表情を浮かべる。

自分がどうやって生まれたか……膨大な知識をどうして得られたか。それを思うと心の傷がうずいた。

“ミッシング・ジエム”という言葉は17歳の時に知った。そして自分が今まさにそういう存在であるのだと確信した。

『知られてはいけない真実』

いつ死ぬとも限らない傭兵という仕事に、そんな真実は早くに墓に持っていけるだろうと思っていた。

しかし25歳の時にある出来事がきっかけで不死になってしまった。彼は永遠にその真実を背負わなければならなくなった。

『人類の理想』——そんな言葉がベリルの脳裏をかすめる。

「おはようベリル」

朝、ハロルドが笑顔で挨拶しながら部屋に入ってきた。

「よく眠れたかね？」

「こんな処で眠れる訳がなかつた」

透明の壁に背中をつき座り込んだまま答える。

「ほっほっ。昔に比べるとかなり賃禄が出ているじゃないか」

ベリルはそれに眉をひそめた。

「お前が私といたのは9歳までだろう」

「君の事をどうして私が知っているのか不思議には思わないのかね？」

「!？」

ベリルがビクリと体を強ばらせた。その反応に老人は目を細める。
「皆、君は“天才少年”だと聞かされていた。もちろんこの私もな」
老人はベリルが耳を傾けている事を確認して続けた。

「君が『キメラ』だと知つたのは、『死んだ後』だよ。私の死体は施設から出され私の理想に賛同していた生徒たちにより葬式が行われた」

目を見開いて聞き入るベリルを一瞥し再び口を開く。

「私の理想に同意していた生徒たちにより葬式が行われようとしていた時に私は目を覚ました。薬により仮死状態にあつたらしい」

ハロルドは奇跡的に生き返った。

「そして施設の中でのを思い起こし、ただの天才少年に対する設備ではなかつた事に気付いた」

ベリルはそこで顔をしかめる。

「私は君を“普通の人間”と思つて教育していたが大きな間違いであつた事に愕然としたと同時に喜びも感じていたよ」

ハロルドは天を仰ぐように両手を小さく広げると興奮気味に発した。

「まさに、私の理想に打って付けの存在ではないか！ 現存するほぼ全てのヒトDNAをつなぎ合わせて造られた『人工生命体』！素晴らしい！」

演説ぶつた語り口にベリルは深い溜息を吐き出す。

「15歳の時に逃げ出した君を捕まえられなくて焦つたが不死になるという喜ばしい特典付になって私は嬉しいよ。まさに永遠に世界を支配出来る」

その言葉にベリルはびくりと反応した。

「……襲撃を受けた事を知っていたのか」

その問いかけにハロルドはニヤリと口の端をつり上げる。

「君を奪還するために入念に練つた計画だったんだがな。君は上手く逃げ出した」

「貴様っ！」

ベリルは怒りを込めて駆け寄り拳の側面で壁を殴りつけた。老人は体を震わせて怒りをぶつけるベリルに近づき冷たい言葉を吐きかける。

「感謝こそされ君に怒りを買っただけだとは思わねえ」

「なんだとっ！？」

「君は私のおかげで自由になれたんだからね」

薄笑いを浮かべて発したハロルドにベリルは言葉を詰まらせる。

「……っ！ 自由など人の命のうえにあるべきものではないっ」

「はっ、君は死ぬまでカゴの鳥でも構わなかったというのか」

その問いかけにベリルは視線を落とし小さく応える。

「私はそれを受け入れていた」

「そうだろうか。君はいつも自由を夢見ていたはずだ。だから彼らを置いて一人で逃げた」

「違うっ！ 違う……っ」

ベリルは激しく頭を数回、振ったあと苦い顔で宙を見つめた。

「一人で逃げたのは事実だ。弁解はしない……あの時の私に皆を守りながら逃げる事など無理だった」

「そう思っただけで襲撃したのだからどうやら君に戦い方を上手く教えた者がいたようだな」

「！」

それにベリルは一人の男を思い出す。

ブラウンの髪、青い瞳。その精悍な顔立ちを——10歳になった彼の目の前に現れた30歳を越えた男を……

「今日から君に戦術を教えるブルー教官だ」と科学者たちから紹介された。

名つての兵士で勲章もいくつも持っているという。

「……」

静かになったベリルを見やりハロルドは目を細めた。

「少し思い出しにふけらせてやろう」

言って部屋から出て行く。トラッドもその後続いた。

「ハロルド……」

ベリルは口惜しげにつぶやいた。貴様だけは許さない……と。

*教官の言葉

暗くなつた部屋でベリルはハロルドとの出会いを思い起こしていた。今にして思えば、彼が初めて自分を見た時、驚きと喜びに顔をゆがめていた。

あの時は気にも留めていなかったが……ハロルドは彼に言語を教える度に自分の理想を語っていた。その理想の一環としてハロルドはベリルにそれなりの言葉遣いを定着させた。

ベリルには彼の言う理論や理想などに何の興味もなく。むしろそんな事は余計な事だと心の中で一笑に付していた。

それが今になって牙を剥くとは……

「……」

片膝を立てて座り込み力なく焦点の合わないベリル。

『何をしている！』

「！」

頭の中で一喝される。ブルー教官の声だった。

『俺が教えた奴の中ではお前が一番優秀だよ』

そんな言葉を思い出して目を細める。ベリルの全てを知り彼の心の奥まで見通しているような空色の瞳はどこまでも澄んでいた。

軍人であつたにもかかわらず彼の持つ雰囲気は刺々しいという事は無く、死と流れる血を見続けた者が持つ独特の存在感を放っていた。

『最善を尽くせ』

そう言つて微笑む教官の姿が浮かぶ。

『ベリル・レジデント！』

「……っ！」

体がビクリと反応した。

「……」

誰もいない前方をしばらく見やる。

「フ……ククッ」

私は何をしている……こんな処で黙っていても何の解決にもならんではないか。ベリルは目を閉じて口の端を吊り上げ再び目を開くその表情は一変していた。

見回して背を預けている透明の壁を指で軽く叩く。

「ふむ……特殊ガラスでは無いな。強化ポリカーボネイト？ こいつは腕一本犠牲にしても破壊出来そうにない」

一応、出入り口はあるようだが……さらに辺りを見回す。

周りに並べられているのはなんの機械だ？ もしかして洗脳するための装置とかじゃないだろうな。と笑って見つめた。

朝――

「おはようベリル」

ハロルドが笑顔で入ってくる。

「……」

何も応えないベリルを老人は目を細めて見つめた。

まだ心の傷は深いとニヤける。今が彼をこちらに引き込むチャンスだ。

「！」

しかし、トラッドだけはベリルの目に変化がある事に気付いた。

「……父さん」

「なんだ？」

「彼は立ち直ったようだよ」

「！　なんだと！？」

驚いてベリルに顔を向ける。ベリルは不敵な笑みをハロルドに向けていた。

「……まさか」

なんという立ち直りの早さだ。ハロルドは感心した。

しかしだからといって彼がここから出られる訳ではない。ハロルドの理想を実現する者にならない限りここからは出られないのだ。

「今日はちょっと面白い方法で君と語り合おう」

言って手を挙げる。

「！」

すると上から透明の液体が降り注がれた。

「それは真水だ。君は何度かこの実験を受けているね」

「水の中でも生きているのか。か？」

みると水位の増す透明の檻の中でベリルは薄笑いを浮かべる。

第2章 強制的な演説

そうして、すっかり酸素がなくなった頃……目の前で自分を睨み付けているベリルをハロルドは見つめて淡々と説明を始めた。

「そろそろ息が切れてくる頃だろう」

「……っ」

苦しみで口を開ける。肺の中の空気が外に出た。

「初めは意識を失うが」

ベリルの体が力なく水の中を漂う。

「しばらくすると目を覚ます」

言った数分後——ベリルの手がピクリと動きゆっくり目を開いた。

「そう、その肉体は酸素を無理に必要としない。水の中ではそれなりの順応性を見せる」

「……」

ベリルは不安定な水中で体勢を立て直しハロルドを再び睨み付けた。

「ふふ……君はどうしてこんな事をするのか解らないでいるだろうね」

老人は言いながらヘッドセットを左耳に取り付けた。後ろにいる白衣を着た男性に手を挙げて合図すると、男性が何かのスイッチを入れる。

「やあ、元気そうでなりよりだ」

「！」

ベリルは驚いたように両耳を塞いだ。

「ああ、ちよつとポリウムが大きいようだね」

ハロルドは白衣の男性に指示をする。気を取り直して老人は話した。

「さて、君ならもう察しはついていると思うが。これは液体に振動を伝えるモノだ」

檻の上部を指し示し続ける。

「そこに特殊なスピーカーが取り付けられている。今の君には私の言葉しか聞こえていない」

一端、言葉を切りニヤリと笑う。

「そして君の言葉は誰にも聞こえない。水の中だからね」

「……」

ベリルは眉をひそめた。

「孤独の世界で私の言葉を聞くしかないんだよ、ベリル」

「……」

トラッドは老人の背後でベリルを見つめながら考えた。

己の声すら誰にも届かない空間。僕だったらすぐに洗脳されるかもね。君はいつまで持つか……？

「さて、君も私の説に全てが反対という訳では無いだろう？」

ハロルドは嬉々として自分の説を高らかに唱え始める。

何度も聞いてきたハロルドの演説にトラッドは小さく溜息を吐き出して部屋を出た。あれが何時間も続くと思うとベリルに少し同情したくなる。

「父さんは熱が入るとなかなか止まらないからね」と口の中でつぶやいた。

生まれた時から父の説とキメラの事を聞かされてきたトラッドは、ベリルに会う事を楽しみにしていた。

確かに彼の存在感は一目置くほどだ。独特の瞳に誰もが魅せられるだろう。

「……」

トラッドは疲れたように自分の部屋に向かった。

数時間後——トラッドはベリルが捕えられている部屋に戻る。

「さすがに疲れたかい？」

ベリルはうんざりした様子で水中から肩をすくめる。唇の動きでトラッドの言葉を理解し応えているようだ。

ハロルドもさすがに疲れたのかフラついて出て行ったらしい。

「……」

ベリルの様子を見る限り効果はあまり期待出来そうにない。

「イルカみたいだな」

呆れたようにトラッドはつぶやく。

彼はのんびりと水中を優雅に泳いでいたのだ。こんな状況でも楽しむ事を忘れない。これが彼の強さなのかもしれない。何に対してもふざけた態度。しかし心の奥では深く何かを考えている。

トラッドはベリルをしばらく見つめていた。

次の朝――

「おはようベリル」

清々しい顔でハロルドは水中にいるベリルに笑いかけた。

水中に入れられて2日目。ベリルはプイ、とハロルドから顔をそむけた。トラッドはそれに鼻で笑う。

そうしてハロルドは再びヘッドセットを左耳に装着する。

直径3mはある透明の円筒形をした檻の中の真水は、少しも濁ることなくベリルを神秘的に映し出していた。

「さてと、また私の説を語ってやろう」

「！ プツ」

トラッドは「あっかんべー」をしたベリルに思わず笑ってしまった。

「余裕じゃないか」

ハロルドは言って再び演説を始めた。

「どうやら無駄のようですよ」

「うむ……」

延々3時間ハロルドは語り続けた。

しかし、ベリルは水中で両腕を頭の後ろで組み目を閉じて笑っている。

「……」

ハロルドの方眉がピクリと上がる。年齢と薬の後遺症を引きずる体には長時間の動作は厳しかった。

「後は任せる」

老人はトラッドに言って部屋をあとにした。

「解りました」

トラッドは白衣の1人に指示を出す。

「！」

檻の中に満たされていた真水が下から徐々に流れ出ていく。

しばらくすると体の重さを感じるまでになった。そうして水が全て無くなった頃、自分の体の重さに両膝をつく。

「ガハッ……」

ベリルは肺の中の水を吐き出した。

長い間、水中にいた体は新しく与えられた環境に順応するため必死になる。

「水の中の気分はどうだった？」

咳き込むベリルにトラッドは笑って尋ねた。

「うむ……なかなかだ」

ベリルは口元をぐいと拭って睨みを利かせる。

トラッドがパチンと指を鳴らすとベリルの足下から衣服が出てきた。

「そんな服じゃあ『風邪を引く』からね」

着替えを済ませたベリルを見やり口の端を吊り上げる。

「やあ、ぴったりだね」

ベリルは仏頂面で何の反応も示さない。

「人類が……」

「！」

「人類がここまで繁栄してきたのは戦争のおかげだろうけど、父さんはもう争いは必要ないと思ってる」

「……」

ベリルはまだ濡れている床を見て壁に背中を預けた。

「すでに戦争はナンセンスで、これからの人類には統率者が必要なんだと説いた」

「ああ、知ってるよ。何度も聞かされた」

「君も全てに反対という訳じゃ無いんだろう？」

「……」

ベリルは答えずに腕を組む。

「1つの種が生き続けていく年数は大体が決まっている。人類も例外じゃない」

「だから独裁者が必要だと……？ 馬鹿げている」

ベリルは吐き捨てるように言った。

「別に独裁自体が悪い訳じゃない。やり方が重要なんだ」

それにベリルは少し身を乗り出し声を低くする。

「確かにそうかもしれない。だが奴の説が正しいとも思えん。人類という同じまとまりだが、生きている環境によって思想や性格も異なる。それを、たった1人の人間が支配出来るとは思えんな」

トラッドはパチンと指を鳴らしベリルを指した。

「そこで君だよ。父さんはずっと支配者としての風格を持つ人間を探していた。で、君に会って直感したらしい」

「迷惑な話だ」

「でも、正しいと思うけどね」

その言葉にベリルは怪訝な表情を浮かべる。

「だって、君は人類という種のDNAの集合体だ。ある意味、神が使わした支配者だと思うね」

そう言ったトラッドの目にベリルは狂気を見て取った。

* 支配者

しばらくしてハロルドが再び訪れた。

「もう大丈夫なの？」

トラッドが尋ねるとハロルドは小さく頷く。

「うむ。大事ない」

老人はベリルを見つめ薄笑いで口を開いた。

「君はこのまま私が死ねば事なきを得ると思っているのだろうがその考えは甘いよ。私が死ねば息子がお前を説得する。息子が死ねばまた次の……」

「だが永遠ではない」

ハロルドの言葉を切つてベリルが静かに応えた。

「人は同じ意志を保ち続ける事は難しい。そう思うから拒否し続ける私に演説まがいの“イカれた話”をするのだろうか？　それが同一人物でないのなら尚のことだ」

「……」

ハロルドはピクリと方眉を上げた。そんな老人にベリルはさらに続ける。

「彼にお前ほどの熱意があるだろうか。それに続く者たちも同様だ。こうして閉じこめられ続けている私の姿を眺め日々演説し続ける事に耐えられる者などいやしなない」

それにハロルドは反論した。

「その前に君の意識が変わる可能だつてあるんだ。逆に君は何十年とここに閉じこめられる事に耐えられるのかね？」

ベリルはその問いかけに口の端をつり上げる。

「生憎、私は普通の人間ではないのでね」

そこにいた全員がゾクリとした。

透明の檻の中にいるにもかかわらず彼の存在感は何をも突き抜けて衝撃を与える。

「……っ」

ハロルドはそれに「ベリル以外に支配者には成り得ない」と確信をますます高めた。

「！」

その夜――トラッドは檻の中で座り込んでいるベリルの元を訪れた。

「まさか父さんを言い負かすとはね」

「あれでひるむくらいなら奴の思想も大したことはない」

片膝を立ててベリルは言つてのけた。

「そのせいでますます君にご執心だよ」

トラッドは肩をすくめる。

「父さんの言つてる事はね君がOKと言えはすぐに実行出来るんだよ」

「！ 何……？」

「驚いた？ う・そ」

「……」

ベリルは眉間にしわを寄せる。そんな彼にトラッドは笑つて続けた。

「僕たちがその計画を立てる必要は無いんだよ」

ベリルはいぶかしげな顔をする。

「だって、君がその気になりさえすれば君自身が計画を立てるからね。傭兵として素晴らしい戦果を上げているし、指揮官としても君はその能力を発揮している」

「なんだ、全部他人任せか」

「あ、そういう言い方する？」

「……そうだな。ハロルドの説は全てが間違いでは無いだろう」

ベリルは宙を見つめ小さく溜息を漏らした。

「！」

「だが、1人の支配者の下には思想や環境の違つ者たちを統率する

者が必要になってくる。その中でもさらに地域で分けて統率する者を置く必要が迫られる。その結果はどうだ？」

「……」

トラッドはしばらく考えてつぶやいた。

「今の状態……」

「そう、今と変わらない」

「で、でも。父さんの説は……」

「ああ、彼の説を極端に要約するならば『世界を1つの社会主義国にする』という事だ。資本主義も社会主義もどちらが良いとは言えない。どちらも突き詰めれば入れ替わる」

ベリルはゆつくりと立ち上がりトラッドを見据えた。

「人は1つになれるが人類を1つにする事は不可能なのだ。同じ人間にはな」

「……」

戸惑いを見せるトラッドの瞳を一瞥しベリルはくるりと後ろを向いて肩をすくめる。

「ま、それも本当かどうかは解らんがね。私がそう思っているだけで出来るのかもしれん」

「だったら……！」

「私には無理だよ」

君が出来ないなら誰がやったって無理じゃないか……！　トラッドはその言葉を飲み込んだ。

「で？」

「え」

ベリルは薄笑いで問いかけた。

「仮に私が同意したとしてだ。お前たちはその支配者の“恩恵”を受ける訳かね？」

「！　それは……」

「それとも他の者たちと同様に支配されるか？」

「……」

トラッドは答えなかった。否、答えられなかった。必死で返した言葉は……

「それを父さんにも聞いてみなよ」

「ああ、そりゃだめだ」

ベリルは笑いながら溜息を吐き出し宙を見つめた。

「私を支配するつもりでいるからね」

その場合、果たしてどちらが本当の支配者なのだろうね……？

そんなベリルのささやくような声がトラッドの耳にこだました。

第3章　損と得

朝――ハロルドと共にベリルの部屋に向かうトラッドに口を開いた。

「昨日ベリルと何を話していた？」

「監視カメラを見れば解るでしょ」

「お前たちの声が小さくて聞き取れなかった。もっと感度を良くせねば」

「父さんの思想を説いてただけだよ。少しでも暇があるなら言った方がいいでしょう？」

「む、そうか。それなら良いが」

「……」

本当はマイクのボリウムをトラッドは下げていたのだ。彼とゆつくり話をしたかったから。

「！」

嬉しそうに入ってきた老人にベリルは眉をひそめる。

「そうやっている今も、君は少しずつ私の説に正しい部分を見つけているんだ」

「威勢のいい爺さんだ」

溜息混じりにベリルはつぶやく。

「大体、人類を支配して何の得になる」

「得だと？　何を言う。争い合う人類をまとめなければ滅んでしまっただぞ。損得の問題ではなからう」

「それなんだが。人類をまとめて何の損得があるのだ？」

「……何？」

予想外の言葉が返ってきてハロルドは当惑した。

「それを今度リスト化してくれないかね？」

ベリルは透明の壁に背中を預け腕を組んで言い放った。

「信じられん！ リスト化だと！？」

通路を歩くハロルドの鼻息は荒い。

「確かに、大きな改善が見られるであろう事項はリスト化してある。しかし！ 奴はなんて言っただと思う！？」

後ろからついてくるトラッドを一瞥し、再び声を張り上げる。

「ほぼ全て、改善が見られる点と悪化する部分をリスト化しろだとい？ ほぼ全て！？ そんな膨大な数を把握出来るものか！」

モニタールームに入りドカッと腰を落ち着ける。

「まあ落ち着いてください」

怒りの収まらない老人の隣に青年は腰掛けた。

ベリルの態度に一度も怒らなかったハロルドが初めて怒りを見せた。いくら嫌味を言われても、ふざけた態度を取られても彼は動じない。

しかし、現実に出せるであろう事柄をそれがどれほど膨大な数なのかを把握した上で言っただけの事にはさすがの彼もぐうの音も出なかった。

「言うに事欠いて『そうなる確率も示したうえでそれが全て揃ったから考えてやらない事も無い』だと……？ ふざけるのも大概にしろ」
トラッドは怒り続けるハロルドを見やりベリルが映し出された監視カメラの映像に目を移す。

「上手く考えたよね」

「！ なんだと？」

すぐに反応したハロルドに説明を加えた。

「さすが父さんが目を付けた相手だと思ってさ。あれくらいでなきや支配者にはなれないよ」

「！」

言われて老人は気を取り直す。

「そうか……うむ、確かにそうだ。ベリルは最高だ」
「……」

自信を取り戻したハロルドをトラッドは目を細めて見つめた。

「ふむ……」

さて、どうしたもんかね……ベリルは目のつり上がったハロルドを思い起こして思案した。

奴を怒らせたとしても、ここから出られる訳じゃない。明日からの演説が多少語気が変わるくらいだろう。トラッドが老人をなだめているかもしれない。

「……」

ベリルはトラッドについて考えた。

ジジイよりも危険なのは彼の方かもしれない……突然、何をしかすか解らないような目をしていた。心の読みにくい表情だ。あのへらへら顔は相手に自分の心情を掴ませないためか？

しかし……ベリルは一端、考えるのをやめて周りを見回した。

「……つまらん」

ずっと同じ場所に閉じこめられているベリルは飽きたらしい。

次の朝――

「おはようベリル」

「……」

ベリルは無視してごろんと寝そべっていた。

「……」

ストライキに出たか。トラッドはベリルの姿に小さく笑いをこぼした。

「また真水を入れて欲しいか」

「入れるならどうぞ」

ベリルは寝ころんだままハロルドに体を向け片肘をつき、その手にニヤけた頭を乗せて言い放つ。

「随分な態度じゃないかね」

「もうお前の相手は飽きた」

言ってごろりと背中を向けた。

「……まあいいだろう」

部屋の中の雰囲気は重たくなったが、ハロルドは気にせず自分の説を高らかに語り始めた。

「君は随分と肝が据わってるんだね」

トラッドは再び深夜にベリルの元を訪れた。

「そりゃあね」

ベリルは肩をすくめてみせた。

「いいのかね？ 夜中に私と晩酌など」

「君とゆつくり話をするにはこの時間じゃないとさ」

「話す事など無いと思うが」

「どうせ暇だろ」

そう言われてしまつては何も言えない。ベリルは小さく溜息を吐き出すと「なんでも話せ」というように右手で示した。

「僕は今25歳だ。 “君と同じ年”だよ」

それにベリルは薄く笑う。

「それに何か疑問を抱かないかい？」

「？」

「君が10歳の時に僕は産まれたんだ」

「！」

トラッドは透明の檻の前に座り込んだ。

「父さんが施設から生還して父さんを看病してた女性との間に産まれたんだ。僕は早産でさ、結構危なかつたみたい」

「……」

トラッドの表情はいつものあやしげな笑みではなく、年相応の青年らしい穏やかな顔つきをしていた。

「でも、母さんの顔は知らないんだ」

青年は青緑の瞳を曇らせる。

「僕が産まれてすぐに死んだって聞かされた。写真も残ってないし。そう考えたら君と大して違わないよね」

小さく笑ったトラッドをベリルは黙って見つめた。

「……」

そんなベリルの瞳に青年は目を細める。

なんて不思議な瞳なんだろう……普段は人に見せないのに、今は僕の言葉に悲しみを表している。それが痛いほど伝わってくる。

「じゃ、そろそろ寝るよ。おやすみ」

青年は立ち上がりベリルの返事を待たずに軽く手を振って入り口に向かった。

「おやすみ」

「！」

ぼそりとベリルの声が聞こえて振り返る。

その距離からは彼の姿は黒いシルエットだけでどんな顔をしているのかは解らなかった。

* 白い箱庭

ハロルドは正直、疲れていた。

毎日、演説し続ける事がこれほど大変だとは……その顔には疲労の色が見える。自分の説には自信はあるが相手がベリルとなるとそう簡単にはいかないようだ。

「しばらく休んだらどうかね？」

透明の檻の中から薄笑いで気遣われる始末。

「くっ……アイシャ！」

「はい」

ハロルドが呼ぶと長い金髪を後ろで束ねてアップしている女性が進み出た。黒い瞳が印象的な若いスレンダーな美女だ。

「しばらく君が彼に説いてやってくれ」

「解りました」

ハロルドは言って部屋から出て行く。

「よろしくね不死者さん」

「ジジイの顔よりはマシだな」

その言葉にアイシャはクスツと笑って老人と同じ話をベリルに向かって語り始めた。

彼女はハロルドと同様に熱が入ると止まらなくなる性格らしく、声が枯れても構わずに語り続けた。

「アイシャ。アイシャ」

「！ 何でしょう、トラッド様」

「そろそろ聞き取りづらいよ。休憩した方がいい」

トラッドが止めに入って彼女はようやく咳き込んで声が枯れている事に気付く。

「そうですね。そうしますわ」

部屋を出て行くアイシャを一瞥したあと、檻の中のベリルに肩を

すくめる。

そうして捕えられて一週間以上が過ぎた頃――トラッドは深夜にベリルと会話を交わす事が日課になりつつあった。

監視している者もそれに慣れてしまっただけ、さして気にも留めなくなった。

「今日は手ぶらじゃないよ」

「！」

床から出てきたものは……

「ほう」

ブランデーの瓶とグラス。

ベリルはそれを手に取り静かに琥珀色の液体を注いだ。久しぶりの酒に笑みがこぼれる。

「君って、旅が好きだよね」

トラッドの問いかけにベリルは少し笑う。

「……君は人間に捕まって色んな実験をされるのに、どうして人間を憎まないんだい？ 中には酷い内容のモノもあったんじゃないのか？」

ベリルはそれに小さく溜息を漏らした。

「お前には『ずっと同じ場所で人々を眺める』という気分が理解出来るだろうか？」

「！」

ベリルはブランデーをひと口味わい視線を横に向けた。

「白い壁に囲まれた部屋であらゆる事を学べるが、自らの意思で見知らぬ人と接する事は出来ない。私は人々が生活している風景を部屋の中でディスプレイ越しに眺めていただけだ」

目の前のディスプレイには存在するのに声をかけても返事は無い。「リアルタイムの映像で確かに今、そこに生きているのに触れる事は出来ない」

人類学や歴史学を学ぶうえで人間の生活を見なくてはならない。

その講義にベリルはいつも目を輝かせていた。

「だったら戦争というモノも学んだハズだ。それを見て何も思わなかったのかい？」

問いかけたトラッドにベリルは柔らかな笑みを浮かべた。

「だが、笑っている人々も見た。共に何かを成し遂げ輝く顔も……暗い部分を見る事の方が容易いのだ。しかし私は輝く部分にこそ目を置くべきだと思った」

忘れてはならない現実もある。しかし、そればかりに目を向けていては笑顔を生み出す事は出来ない。

「人は誰も不幸になりたくて生きている訳ではないのだ」

いつも見る冷たい表情とは想像も出来ない柔らかな顔がそこにあった。

「……」

その表情に言葉を詰まらせたトラッドだったが切り返す。

「それなら、君を閉じこめていた人たちを憎んだらう？」

その言葉にもベリルは頭かぶりを振った。

「彼らは私のために出来る限りの事をしてくれた。本来なら『実験で得た成果』としか思われなくても仕方のない存在である私を自分たちの子供のように可愛がってくれたのだ」

肩をすくめて続ける。

「まあ彼らは愛情を示す事がヘタだったからね。かなり仏頂面で私に接していたよ」

一端、言葉を切ってベリルはブランデーを口に含む。

「私は彼らを傷つけてまで外に出たいとは思わなかった。私の事を知らない専門家たちもそれなりに愛してくれていたしね」

目を丸くしているトラッドにベリルは静かに問いかけるように発した。

「その中で、私に何を憎む要素があると？」

「君なら絶対に支配者になれるんだよ。この世界を掌握したいとは思わないのかい？ 君なら全ての人を幸せに出来るかもしれないん

だよ」

「ククク……」

トラッドの質問にベリルは喉の奥から笑いをこぼす。

「私はもうあの場所には戻らない」

「！？」

ベリルは背中を透明の壁に預け天井を見上げた。

「もう、誰とも接する事の無い処にはね」

うえに立つ者は孤独だ。

「仮に支配者になったとして、周りに何人いようとそれは私が求めるモノではない」

かつて白い部屋の中で見た笑顔……喜び。それを自分の目で足で1つ1つ確かめていきたい。己の存在し続ける価値は人類の中にあるのだ。

「私は世界の中に立ちたいが世界の上に立ちたいとは思わん。何故、人を憎まないのか私に問いかけたが、人を否定し憎む事は私自身の存在を否定するのと同じ事だ」

人から造られた己を否定など出来ようか。

「辛い現実だけに目を向けても意味は無いのだ」

影の部分があるのなら、それを輝く場所に向きたい。己の力を1人でも多くの輝く笑顔に変えたい。

「……」

トラッドは彼の力強い瞳に圧倒された。

そうだ……彼の存在は「人類の理想」そのものじゃないか。争い合い、いがみ合う人類が唯一、1つにまとまっている形が“ベリル”だ。

そう感じたから施設のみんなは彼を逃がしたんじゃないだろうか？

「美味しかったよ。ありがとう」

黙り込んだトラッドに言って、ベリルは下がるであろう床にグラスと瓶を置いた。

「おやすみ」

そしていつものようにリッドの背中に応えた。

第4章 道化師と武器商人

次の日――また別の人間がベリルの説得を始める。少しカールの
かかった茶色の短髪で緑の目。学生時代は何かスポーツをやっ
た事が窺える体格と無骨そうな顔立ちの青年だ。

「……」

飄々としているベリルに少し眉がつり上がる。見た目だけでい
えベリルよりもやや年上だろうか。

言うことを聞かない年下に熱弁をふるっているような感覚に青年
はイラついた。

「こんな奴が本当に支配者の器なのか？」という意識が垣間見えて
ベリルは薄く笑ったがトラッドは頭を抱えて青年を部屋から放り出
した。

「今の君にはそこは窮屈だろ？」

話題を変えるようにトラッドは口を開く。

「今も昔もここは狭苦しい」

「！ 施設は広がったかい？」

「この部屋くらいが私のプライベートルームだった」
トラッドは口笛を鳴らす。

「監視カメラは常に回っていたがね」と付け加えた。
「オモチャとか何が好きだったの？」

「さあ、なんだったかな。パズルは置いてあったが」

「積み木とかは？」

「ああ……積み木としては遊ばなかったがね」

「え、じゃあ何に使ったの？」

「幾何学について考えていた」

青年は呆れて二の句が継げない。

「トラッド！」

「！」

ハロルドが少し怒った口調で会話をさえぎった。

「余計な話はするな」

「すいません」

老人はベリルに向き直り両手を後ろで組み口を開く。

「そうやってとぼけているが、徐々に私の説が正しいと思い始めているだろう？」

「生徒の感情をもう少し制御出来るようにしておけ」

「！」

ハロルドは方眉を上げて睨みを利かせた。

それに、トラッドは小さく溜息を吐き出す。ベリルの言葉にモロに反応しているのがバレバレだ。

「3日後、再び水の中で聞いてもらう」

「またか」

ベリルは少しげんなりした。

その夜――トラッドとベリルは語り合う。

「水の中にいたらお酒も飲めないね」

「そうだな」

薄笑いで応え赤ワインを傾ける。

「あ、じゃあ水をお酒にすればいいんだ」

「それはそれで違う気がするぞ……」

楽しそうにしているトラッドをベリルはいぶかしげに見つめた。

「毎日、何故来る」

「ん、何故かな」

少し考えて発する。

「ああ、解った。普通に話が出来るからだよ」

「？」

ベリルは怪訝な表情を浮かべた。

「だってさ、みんな僕には丁寧な言葉遣いなんだ。それに、会話といたら父さんの説を語り合うだけだし」

それにベリルは笑った。

「ま、でも。父さんの説は正しいから、僕も君の説得には加わるつもりだよ」

「あれは響きの悪い子守歌だ」

「！ 言ってくれるね」

トラッドはワイングラスをゆっくり口に含む。

「父さんは君に取り憑かれてるんだ」

「！」

「世界の指導者になれる人間だと感じた頃から、教師として招待した施設の友人にそれを語っていたそうだけど」

それが上の人間に知られ殺されかけた。

「上の人間は驚いただろうね。絶対に口外出来ない機密なのに、世界の指導者にしたいだなんて」

一命を取り留め看病してくれた女性に心を傾けるも、トラッドが産まれて再び自分の説を実現したいという理想が頭をもたげた。

それにはまずベリルが必要だ——施設を必死で見つけ出し、殺しを専門とする傭兵たちを雇って施設を襲撃した。

傭兵たちには「子供がいたら必ず生きて捕えよ」と命じたがベリルはいなかった。どれほど悔しい思いをしただろう。

彼は9歳までのベリルしか知らない。それまでのベリルはほとんど表情を変えずハロルドが言い聞かせればすぐに洗脳出来るのだと思っていた。

そんな彼が施設から逃げ出すとは……ハロルドはベリルを探した。今まで貯めた金を全てつぎ込み、ようやく見つけたベリルはフリーの傭兵になって名を上げていた。

それに大いに驚いたハロルドだが、自分の計画には打って付けだと思った数年後——不老不死まで手に入れた。

「彼が支配者になるのは運命なのだ」と確信する。

「他に方法は無かったのか……」

ベリルが苦々しい顔で口を開いた。

「あそこには300人のガードと科学者、専門家がいた。殺す必要は無かった」

その拳に力が入る。

「代理の復讐だったんだよ。殺されかけたからね」

ベリルは瞼を強く閉じたあと静かに目を開く。

「殺しを専門にしている傭兵と言ったな。奴らのほとんどは殺しを楽しんでいる」

「じゃあ、そんな奴らがいない世界を君が作ればいいじゃないか」
言われてベリルは目を丸くした。

「お前は『働き蟻の法則』を知っているか」

「ああ……『働き蜂の法則』とも言っちゃつね」

「必ず2%の人間は仕事が出来ない。不思議だろう」
ベリルは続ける。

「それは変えようのない自然現象だ。他の者が働けなくなれば彼らがその役目を果たす」

「その傭兵たちも世界には必要だって言うのかい？」

「そうは言っていない。ただ、良くも悪しくも100%無くす事は不可能だろう。私なら上から見下ろすよりも目の前で戦う事を選ぶね」
立てた片膝に肘を突き頭を乗せてベリルは薄笑いを浮かべささやくように発した。

* 図りきれない

「さて、明日そこを液体で満たすが。何がいいかね？」

ハロルドは口の端を吊り上げて意地悪く言った。

「なんなら海水にしてあげようか」

「そちらのご自由に」

ベリルは右手をすつと差し出して薄笑いで言つてのける。

アイシャという女性も無骨な青年も喉を痛めてしまったようで病院通いを始めたらしい。

「とりあえず腹が減った」

言つたベリルにハロルドは鼻で笑う。

「嘘はいかな。不死になつた時点で食欲というモノは存在しないのだろう？ 味わう事は出来ても腹が減る事は無い」

言われてペロリと舌を出す。

「食べた物も排泄する必要が無い。全ては君の血肉とエネルギーに変換される」

ベリルは感心するようにハロルドを見た。

「これくらい君を監視していれば解る」

「食べ過ぎると苦しくなるのは本当だぞ」

左手の人差し指を立ててベリルは真剣に言つた。

「……胃の容量は変わらないんだ当たり前だろう。だがすぐに消化するハズだ」

「正解」

目を据わらせ半笑いで褒める。

ハロルドは方眉を上げて部屋から出て行つた。周りが敵という中でベリルは平然としていた。

彼の態度にキレかけている者もいる。トラッドはそれに「それが彼の手だ」と教えるが腹立たしい気分は払えないようで、わざわざ彼の前に立ち睨み付ける者も出てきた。

ベリルの全てを把握する事など出来る訳は無いのだ。誰1人、彼を理解している者はいないのだから——もっとも、彼を理解しているなら説得は無駄だと諦めるだろう。

とぼけた態度と横柄な口調は強い意志の現われでもある。

トラッドはあえて口にしませんが、数人がベリルに惹かれ始めている事にも気付いていた。

「当然かもね」などと考える。

このままだと崩壊するのはこちら側かもしれない。トラッドは目を細めた。

次の日——トラッドはベリルの檻に真水を注ぐ前に皆を1つの部屋に集めた。

「みんなは父さんの説が正しいと思ったから、ここにいるんだろう？ 彼は父さんが見込んだ人物なんだ。父さんを信じて事にあたってくれ」

言われて一同は彼の言葉に深い相づちを打った。トラッドはさらに付け加える。

「考えてもみて。あんな態度取れる？ 普通の人間なら無理だよ。支配者になれる素質を持つ者だからこそなんだ」

彼の言葉は結束を強くした。それが見て取れたトラッドはニコリと笑ってみんなをベリルの部屋に促す。

しかしその瞳は何故か複雑な色を見せていた。

部屋に入るとすでにハロルドがベリルの檻の前に立っていた。

「何をしていた」

トラッドに目を向けず問いかける。

「仲間の結束を固めてたの」

「そうか。始めるぞ！」

メンバーが持ち場についた事を確認するとハロルドは声たかだかに指示した。以前と同じようにベリルの頭上に真水が降り注ぐ。

「今度は2日だけだと思うな」
ハロルドはベリルに不敵な笑みを浮かべた。

前回と同様に水が満たされベリルはしばらく苦しみ一端、気を失って再び目を覚ます。

老人はそれを確認するとヘッドセットを左耳に装着した。そして、いつものように演説を繰り返す。

「……」

父はもうどれくらいこの説を唱え続けているのだろうか……トラッドは眉をひそめる。子供の頃から聞かされて一言一句覚えていたのだ。

多少言葉を換えながら水の中のベリルに語り続けるハロルドの背中を見つめて思い起こす。

彼の望むままトラッドは学問をひたすら学び飛び級を繰り返す……

…17歳で有名大学を主席で卒業した。

卒業したあとはハロルドの説を唱え仲間を増やした。

『自分の言葉に傾く人間がいる』。それが楽しかった。

今ではスポンサーも増えて施設は大きくなり、ベリルを捕えられる装置も開発出来たのだ。

もちろんスポンサーにベリルの正体は告げてない。この施設にいる者だけがベリルの真実を知っている。

彼を捕え続けるのは至難の業である……天性の素質にその技術が加わって彼の扱いは困難なのだ。

第5章　命の灯火 - いのちのともしび -

演説は入れ替わり立ち替わり……日に10時間は行われた。

ハロルドの説をしつかりと語れる者はそう多くない。トラッドもその中に加わるがこちらの疲労はどこ吹く風か、ベリルには一向に伝わっていないように感じられた。

3日ほど水の中だが外でつらつらと語っている間も水中をゆったりと泳いでいる。本気でイルカに喋りかけているんじゃないかと自分を疑いそうになる。

最近では壁を叩いて頭の中で歌を歌っている始末だ。トラッドに諭された仲間たちも終始このような態度では意志も弱まるというものの。

この方法は返って逆効果なのではとトラッドは感じ始めた。

ベリルを水中に沈ませて一週間――さすがにトラッドはハロルドに意見した。

「父さん、この方法は逆効果だよ。こちらの仲間の意識が彼に敵対的になってきてる」

「むう……普通の人間なら最も効果的な方法なのだが」

「彼は普通じゃない。だから選んだんでしょう？」

「……」

ハロルドは頭を抱える。

彼が自らの意志で納得しハロルドの説を実行しなければ意味が無い。無茶な洗脳は出来ないのだ。

「……仕方がない。水を抜け」

ハロルドはうなだれて指示した。

「久しぶりに酸素吸ったね」

水の抜かれた檻の中のベリルを見てトラッドはニコリと笑った。

「いちいち水を吐き出すのは疲れる」

服を着替えながらベリルはぶーたれる。

「痛みや苦しみは不死になる前と同じなの？」

「何1つ変わつとらんよ」

「へえ……それは面倒だね」

「回復が速い分、続く痛みは短いがね」

「神経毒とかだとどんな感じ？」

好奇心に満ちた目で問いかける。

「一般的な反応のあとに治るだけだ」

「ふーん」

トラッドは周りを見回すベリルを一瞥し小さく笑った。

「どうやって逃げたそうか考えてる？」

「当然だ」

「女の人をたらし込めば逃げられるかもよ」

自分の右側にいる女性に手を示す。

「!？」

言われた女性はギョツとしてトラッドを見やった。

「うむ。それも考えていた」

「!？」

女性はさらにギョツとしてベリルに目を移す。そんな女性にトラ

ッドは「ごめんごめん」と笑いながら手で示した。

「でも……」

表情を一変させ声のトーンを下げる。

「君の秘密を握っている僕たちを残して行くの……？」

「……」

その問いかけにベリルは応えない。

「君は1人には戻りたくないと言いながら、正体を知られてA国が捕えに来ても素直に行く気にいるんだらう？」

無表情だが目だけは陰しくベリルを見つめる。それでも反応を示さない。

「そうやって君は限りなく受け入れて、許していくんだ」

「！」

再び戻ったハロルドは部屋の空気が違う事に怪訝な表情を浮かべる。

「どうしたトラッド」

「なんでもありません」

すい……とハロルドから視線を逸らしてベリルの檻の側に歩み寄りその目を見据えた。

「君に会えて良かったよ。楽しかった」

いつもの笑顔に戻ったトラッドにベリルは視線を外し床に腰を掛けようとした。

が――ふと気付く。

「楽し“かった”？」

眉をひそめてトラッドに目を向ける。

「！　トラッド様それは……っ」

操作パネルにいた女性がトラッドの押したボタンに声を上げた。

<緊急動作を実行準備します>

感情の無い声が施設中に響き渡る。そしてその声と共に全ての部屋のドアが閉めきられた。

* 天使の微笑み

「なんだっ!？」

「これは一体……!？」

部屋の中にいた一同は口々に声を上げる。

「トラッド! 何を……!？」

「さすが父さんだね。確かに彼は最高だよ」

驚くハロルドにトラッドは冷たい微笑みを浮かべて発した。

「何を言っている……」

<20秒後に実行します>

意思のない女の声が構わずに進めていく。

「ドアが開かない!」

「助けてくれ!」

部屋にいる人たちは逃げようと必死になるが、ロックされたドアはピクリとも動かなかった。

「ベリルは最高の支配者になれるよ」

トラッドは笑って両手を少し広げハロルドに言い放つ。

「だって、彼の意見の方が正しいって思っちゃったんだから」

「トラッド……」

ハロルドは狂気じみた彼の目に何も言えなくなった。

「トラッド! やめろっ」

「ガードたちにも重要な話があるからって部屋の中に入るように言っておいたんだ」

壁を叩いて止めようとするベリルにゆっくりと向き直り発する。

そしてごそごとガスマスクを取り出す。それを見た何人かはその存在に気付いてガスマスクを探し出した。

放送で流されている『緊急動作』とは、施設を何らかの事情で放棄しなければならなくなった時のための消去プログラムである。

神経毒が施設中に噴霧される。

「無駄だよ、他のガスマスクは全部壊したから」

<噴霧します。3……2……1。噴霧開始>

「……っ」

音もなく辺りは静まりかえった。

しばらくして――

「ぐあっ!？」

「がはっ!」

口々に叫んで首を抑えて倒れ込む。

「ト、トラッド……何故……」

ハロルドは倒れながら青年にすがりついた。

「……」

そんな彼をトラッドは静かに見下ろす。

「父さん。僕はね、あなたから何1つ愛情を受けた記憶が無いんだよ。不思議だよ、ずっと側にいたのに」

あなたは世界を統一したいとは思っているけどあなた自身からは誰にも愛情を与えようとしなかった。

「そんな人間が世界をまとめようなんて、おこがましいとは思わな
いかい?」

「トラッド……」

「父さんがいるとベリルが困るんだ」

天使の微笑みと言われた表情は悪魔の微笑みに取って代わる。

そうして立っているのは檻の中のベリルとガスマスクを付けたトラッドだけになった。

「トラッド!　なんて事を」

「君はここから脱出出来た際、父さんだけは殺して逃げるつもりだったんだろ?」

「!」

「でも君が手をかける価値は無いよ。僕が代わりに復讐してあげる。そこは密閉されてるから毒は入らないよ。君が苦しまなくて良かった」

「トラッド！」

これで終わりじゃない……ベリルは天性の勘でそう感じていた。

「施設もいらないから壊しちゃおう。実は、あちこちに時限発火装置を仕掛けておいたんだ」

「！？」

「あと10分ほどで爆発する。その入れ物は頑丈だから中にいれば大怪我をする事は無いよ。出られないのも困るだろうけど。何、爆発すれば割れて出られる」

「トラッド！ 入れ！」

「だめだよ。君の秘密を知ってる者は生きてちゃいけない」

「何を言っている！ 入るんだっ」

「……」

トラッドに呼びかけるベリルの手に壁越しに手を添える。

「なんだろうね……この気持ち。もしかしたら君に惚れちゃったのかな」

言って笑い装着しているガスマスクに手をかけた。

「！？ やめろ……っ」

トラッドはベリルの制止も聞かずガスマスクを外した。

「やっぱり最後は君の目をちゃんと見ていたい」

「馬鹿なっ！」

ベリルは力の限り入り口であろう部分を蹴り続ける。

「トラッド！」

青年が倒れ込むのとドアが開くのは同時だった。

「……っ」

ベリルはトラッドを肩に抱え檻の中に逃げ込み、もうろうとしている彼にガスマスクを被せた。

「！」

「トラッド」

彼は心配そうに見下ろすベリルを見て微笑んだ。

「はは……なんだ、もう逃げ出せる算段はついてたんだ。何時の間

に入り口をゆるめたの？ さすがだね」

「……っ死ぬな」

何度か咳き込んだベリルだが、檻の中は換気されているらしい胸の苦しみが薄れてくる。そうして毒が消えたと感じたベリルはトラッドからガスマスクを外した。

「君は優しすぎる。どうして、そこまで人間を信じられるんだ」

「そんな事、解るものか」

抱きかかえている手が微かに震える。目の前に救えない命がある……ベリルは悔しい表情を浮かべた。

生み出された施設が襲撃され、たった1人で逃げなければならなかった苦しみ。あの時の記憶は今も彼の心に大きな傷を残している。その傷は永遠に消える事は無いだろう。

「神様は意地悪だよね」

「！」

トラッドはそうつぶやいてベリルの瞳を見つめた。

「君を生み出しておいて……君に沢山の苦しみを与えてる」

まるで君の苦しむ姿を楽しんでいるようじゃないか。

「フフ……それとも、自分の近くに置くために試練を与えているのかな？」

じゃあ、やっぱり神様は意地悪だ。

「トラッド！」

「これで、君の正体を知る者は……いなくなる。君よりも、僕がそれにホッとしてる」

君を縛る鎖なんて必要無い。

「君には、自由が……一番似合う」

そう言っつてその目に光が消えた。

「！　トラッド！？　おいっ……トラッド……っ」

ベリルは動かなくなつたトラッドの体を強く抱きしめる。

「何故だ……何故ここまでしなくてはならない……こんな事！」

ベリルが叫んだその刹那——施設は大きな爆音を響かせて崩壊し

ていった。

「……う」

目を覚ましたベリルの目の前に記憶にある施設の姿はなく……瓦礫の山が広く続き、唯一トラッドの遺体だけは綺麗にベリルの腕の中にあった。

トラッドの遺体を丁寧に寝かせ両手を胸の上で組む。

「……っ」

そうして痛む体をゆっくりと起こし歩き出した。

まだ残る火薬の匂いに顔をしかめる。振り向かなかったが奥歯を強く噛みしめた。

「人の命のうえにある自由など誰が欲しいものか……」
つぶやいたベリルの言葉を風がさらっていった。

END

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0483s/>

あやつりの糸

2011年8月30日03時24分発行